表2. 対夫エゴグラム得点と挙児希望意識との相関（年齢の影響を除いた偏相関係数）

（1）ＣＰ－挙児希望意識	ρ=0.128
（2）ＮＰ－挙児希望意識	ρ=0.250
（3）Ａ　－挙児希望意識	ρ=0.027
（4）ＦＣ－挙児希望意識	ρ=-0.028
（5）ＡＣ－挙児希望意識	ρ=0.032

対夫エゴグラム得点と今後の子ども希望数の偏相関係数を算出した（年齢の影響を除いた）。FCつまり、自由な子どもと今後の子ども希望数との間には、負の相関（ρ=-0.229）がみられた。妻が夫について、自由な子どもの自我が高いと捉えている場合、今後の子ども希望数が低い傾向にあった。(表3)

表3. 対夫エゴグラム得点と今後の子ども希望数との相関（年齢の影響を除いた偏相関係数）

（1）ＣＰ－今後の子ども希望数	ρ=-0.025
（2）ＮＰ－今後の子ども希望数	ρ= 0.099
（3）Ａ　－今後の子ども希望数	ρ= 0.103
（4）ＦＣ－今後の子ども希望数	ρ=-0.229
（5）ＡＣ－今後の子ども希望数	ρ=-0.004

3．対夫エゴグラム得点と総子ども数

対夫エゴグラム得点と総子ども数の偏相関係数を算出した（年齢の影響を除いた）。いずれの項目においても相関はみられなかった。妻が解釈する夫の自我状態と総子ども数には関連がみられなかった。(表4)

表4. 対夫エゴグラム得点と総子ども数との相関（年齢の影響を除いた偏相関係数）

（1）ＣＰ－総子ども数	ρ=-0.090
（2）ＮＰ－総子ども数	ρ=-0.009
（3）Ａ　－総子ども数	ρ= 0.094
（4）ＦＣ－総子ども数	ρ=-0.146
（5）ＡＣ－総子ども数	ρ=-0.194

対夫エゴグラム得点と現在の子ども数の偏相関係数を算出した（年齢の影響を除いた）。ACつまり、順応なこどもと現在の子ども数との間には、正の相関（ρ=0.259）がみられた。妻が夫について、順応な子どもの自我が高いと捉えている場合、現在の子ども数が多かった。(表5)

表5. 対夫エゴグラム得点と現在の子ども数との相関（年齢の影響を除いた偏相関係数）

（1）ＣＰ－現在の子ども数	ρ=-0.073
（2）ＮＰ－現在の子ども数	ρ=-0.103
（3）Ａ　－現在の子ども数	ρ=-0.010
（4）ＦＣ－現在の子ども数	ρ=0.096
（5）ＡＣ－現在の子ども数	ρ=0.259

Ｄ．考察

1．（妻による）夫についての捉えかたの違いと挙児希望との関連

妻が夫について、「NP：保護的親の自我状態が高い」と捉えていると、妻の挙児希望意識が高いということがわかった。東大式エゴグラム第２版の解説によれば、NP：保護的親とは、共感、思いやり、受容などの、子どもの成長を促進するような母親的部分をいう。また、他人に対して受容的で、相手の話に耳を傾けようとする（東大式エゴグラム第２版）。褒め言葉が多く、同情的で、愛情深く、親身になって世話をし、親切な言葉をかけて相手を快適な気分にする（東大式エゴグラム第２版）。肩をやさしく抱くような態度や、相手に幸福感、満足感を与える陽性のストロークを多く発するという（東大式エゴグラム第２版）。つまり、妻が、夫について、子どもの成長を促進するような母親的部分の自我が高いと捉えている場合、妻の挙児希望意識が高いと読み取ることができた。

妻が、夫について、「FC：自由な子どもの自我が高い」と捉えていると、今後の子ども希望数が低いということが明らかになった。FC：自由な子どもとは、親の影響をまったく受けていない、生まれながらの部分であるホメオスターシスの原理に基づいた自然、随順の営みで、快感を求めて天真爛漫に振舞う（東大式エゴグラム第２版）。直感的な感覚や創造性の源で、豊かな表現力は周囲に温かさ、明るさを与える（東大式エゴグラム第

２版)。感嘆詞を多く発し、よく笑ったり、泣いたりして大騒ぎをする人はFCが高い（東大式エゴグラム第２版)。つまり、妻が、夫について、快感を求めて天真爛漫に振舞う、生まれながらの部分である自我が高いと捉えている場合、今後の子ども希望数は低いと読み取ることができた。

２．（妻による）夫についての捉え方と子ども数との関連

妻が夫について「AC：順応な子どもの自我が高い」と捉えていると、現在の子ども数が多いということがわかった。AC：順応な子どもとは、FCの本能的な部分に対して、人生早期に周囲の人たち（特に母親）の愛情を失わないために、子どもなりに身につけた処世術に順応した子どもという（東大式エゴグラム第２版)。親たちの期待にそうように、常に周囲に気がねをし、自由な感情を抑える（東大式エゴグラム第２版)。思っていることを口に出さず、消極的な人である（東大式エゴグラム第２版)。つまり、妻が、夫について、消極的で控えめで周囲に従順であると捉えている場合には、現在の子ども数は多いと読み取ることができた。

夫についての捉え方と、総子ども数との間に関連はみられなかった。つまり、夫婦が現在、将来を含めて子どもを欲しいと思うかどうかと、夫についての捉えかたとあいだには関連がみられなかったことを意味する。

これらを総合すると、挙児希望に正に相関するのは、高いNP、AC、低いFCということになる。東大式エゴグラム第2版によると、これはおふくろタイプか忍の一字タイプである。この両者に共通することは、周りへの思いやりが非常に強く、まじめであり、頼まれたことは決して断らないことである。デュセイによると、このタイプは“殉教者”か“軍曹”だという。両者に言えることは、施し上手なことであるとデュセイは著書で述べている。

以上のことから、妻が夫について、周りへの思いやりが非常に強く、まじめであり、頼まれたことは決して断らないタイプであると捉えている場合、妻の挙児希望意識は高く、現在の子ども数が多く、今後の子ども希望数も多いということが考えられた。つまり、（妻における）夫についての捉え方と挙児希望のあいだには有意な関連がみられるのではないかという示唆を与えると考えられた。

Ｅ．文献

1) 国立社会保障・人口問題研究所．第11回出生動向基本調査．結婚と出産に関する全国調査，夫婦の結果概要，1997：1－27
2) 東京大学医学部心理内科．新版エゴグラムパターン．TEG(東大式エゴグラム)第2版による性格分析，金子書房，1995.
3) 赤坂徹，白崎和也，根津進．両親が判定した幼児のエゴグラム．心身医学．1990，30(5)：475－481
4) 清水敬子，戸張幾生，筒井未春．中心性漿液性網脈絡膜症とA型傾向判別表．臨床眼科．1999,53 (3)：277－280
5) ジョン・Mデュセイ．エゴグラム．ひと目でわかる性格の自己診断，創元社，1980.

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
（分担）研究報告書

情報データベースの構築・評価に関する研究

－心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書データベースのインターネット上の公開について－

分担研究者　中村　敬　日本子ども家庭総合研究所情報担当部長
研究協力者　斉藤　進　日本子ども家庭総合研究所母子保健部主任研究員

心身障害研究および子ども家庭総合研究事業における報告書のデータベース化は、昭和50年度～平成11年版度までを全文報告書として、ＣＤ版データベースを完成していた。しかしながら、インターネットの普及にともない、Web上での報告書データベースの公開が望まれている。本研究班では平成12年度以降の子ども家庭総合研究事業報告書データベース化を進めている。昨年度は、集積してある研究報告書の電子データのうち、平成元年度版から11年度版までの電子データをインターネット上で公開するためのファイルとして再構築を行った。今年度は、平成12年度および13年度版研究報告書のデータベース化に取り組み、来年度以降インターネット上での公開が可能になった。Ｗｅｂは母子愛育会日本子ども家庭総合研究所のサーバーを介して、報告書データを提供するシステムを構築し、試行段階に到達している。今年度はこの概要について紹介する。

【見出語】　心身障害研究報告書　データベース　電子データ　インターネット　PDF

Ａ．研究目的

過去の厚生省心身障害研究報告書および厚生科学研究子ども家庭総合研究事業報告書の電子データ化は昭和50年～平成11年度版まで完成し、検索機能を備えたデータベースとして、ＣＤ化し広く関係機関に配布した。しかしながら、この貴重な資料を多くの関係者が活用できるようにするためには、爆発的に普及してきているインターネットを介して、配信できるシステムを構築する必要がある。このことにより、臨床医学、母子保健、子ども家庭福祉、大学での教育などに、より広く活用されるようになるものと考えられる。

Ｂ．研究方法

現在までのデータベース化に向けた取り組みは、過去の研究により集積した研究報告書の書誌情報および本文の画像ＰＤＦファイルを用い、インターネット上に、この貴重な資料を提供するためのシステムを再構築するための方法論を検討してきた。また、毎年追加される新しい報告書を定期的にＷｅｂ上から提供するための方法論を検討した。方法論を確立するための要件は、以下の通りである。

1）Ｗｅｂ上で自由語により目的の報告書を検索できること。
2）検索した報告書をＷｅｂ上からダウンロードできること。
3）主任研究者報告書、分担研究報告書、研究協力者報告書、別添資料などを個別に入手できること。

このために、書誌情報と報告書ファイルを別にもち、書誌情報を使って目的の報告書を検索し、報告書ファイルをダウンロードする方式を検討した。

検索に用いる書誌情報の構造は報告書ID（各報告書のユニーク番号）、研究班名、研究テーマ（主任、分担、共同研究など）、研究者名（主任、分担、共同研究など）、報告年度、見出語からなるタブ区切りファイルで、これに本文（PDFファイル）を報告書IDで関連づけたデータベースを作成した。

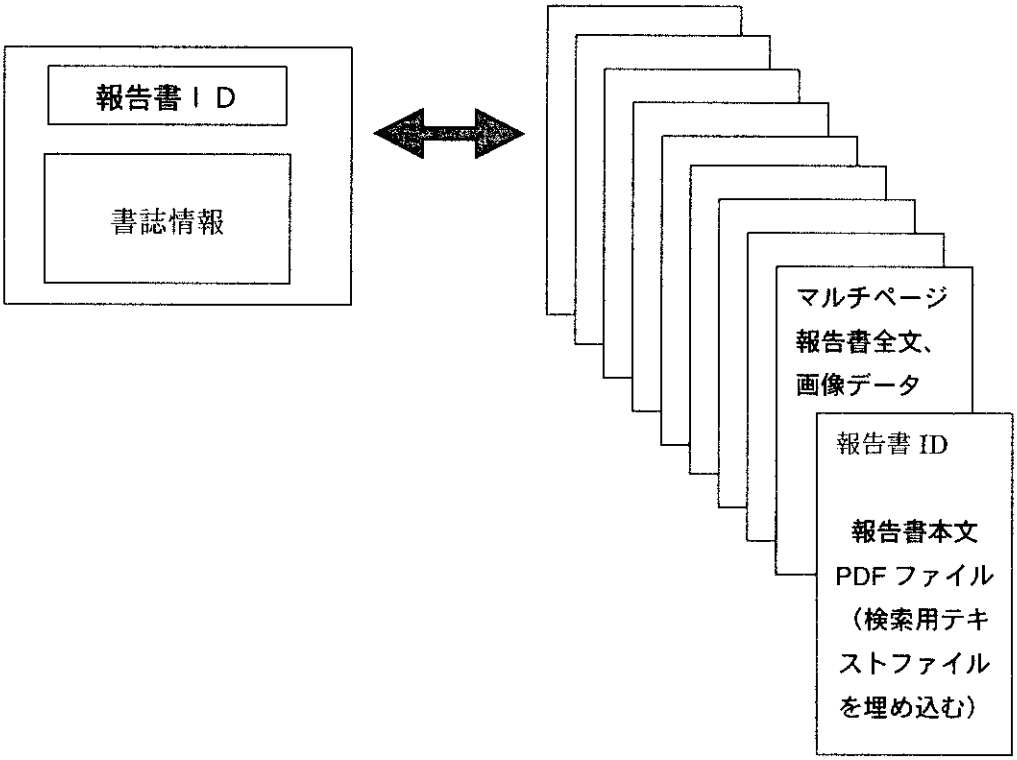
Ｃ．研究結果

1）書誌情報の再構築

書誌情報と検索用テキストファイルをジョイントし、以下の項目のタブ区切りファイルを構築した。

報告書 ID	主任研究者テーマ	分担研究者テーマ	研究協力者テーマ
共同研究者テーマ	研究者名	報告書年次	見出し語

Web上に提供するデータベースは、これに報告書ＩＤをもとに、報告書全文ＰＤＦファイルを関連づけた。



2）Web上で利用可能な報告書の研究年度

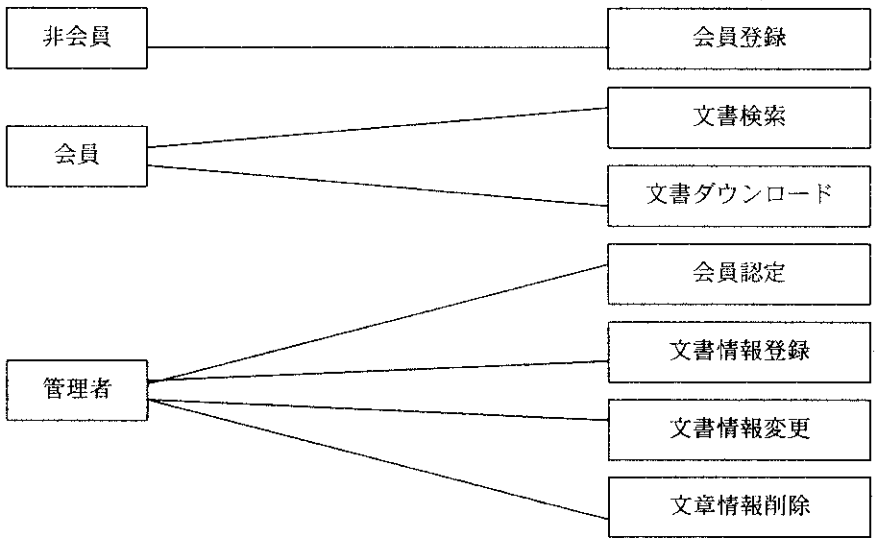
今年度研究において、Web上で利用できるデータベースの構築に関する方法論は完成したので、利用可能なデータベースの範囲は平成元年から平成13年度報告書版までになる。昭和63年度以前のデータについても必要に応じて、順次データベースに追加する予定である。

3）新しい報告書のファイル形式

平成12年度、平成13年度報告書については、報告書原稿をイメージスキャナで画像として取り込みPDFファイル化して用いる方法を採用した。

4）検索システム

書誌情報フィールドにより検索を行い該当する論文をダウンロードできる機能を考案した。また、PDF内にテキストデータを埋め込んで、全文検索するシステムも考案した。



5）アクセス権

不特定多数による利用を防止するため会員制とする

6）子ども総研のリニューアルしたサーバーを用いる

FTPサーバーはハッカーから攻撃を受けやすいので、より安全なHTTPSサーバーを用いる。

7）平成15年度末の完成を目指して試験的運営を開始する予定である。

D．考察

現在のCD版データベースは、1975年度から1999年度の研究報告書が11枚のCD－ROMにデータベースとして、収納されている。1998年度、1999年度は報告書の電子ファイルからPDF化したので、テキストデータとして文字列検索が可能であり、全文テキストファイルとしての意味をもっている。このファイルは、PDFファイル上では編集はできないが、一部テキストとしてCut and pasteが可能であり、活用範囲が広い。1997年度以前の報告書データは、イメージとして収載してあるため、OCRで作成した検索用テキストを一部本文末尾に貼付してある。検索およびオーサリングソフトとして、Alchemy release 6Jを使用しており、このソフトは電子ブックとデータベースの構造を有している。

今回開発したWeb版は従来のデータベースシステムを使用して書誌情報から目的の報告書を検索し、当該報告書と結びつけダウンロードできるシステムである。相違点は、Alchemyを使用しないので検索結果の階層構造が表示ができないことである。

新しく開発したシステムでは、報告書の電子化の方式はPDFの画像ファイルとし、書誌情報とリンクさせて用いることとした。これは、過去の研究班で試行した研究者に報告書を作成するためのソフトを指定し、電子ファイルとして提出してもらう方法論に無理が生じたことや、テキストファイルのPDF化の過程でトラブルが生じることがあるため、報告書原稿を忠実に再現するためには報告書原稿を画像として取り込む方が正確であり、また電子化にかかる費用を節約できることが判明したためである。

イメージデータからのPDF化を採用したため、不可能となった全文検索を代替出来るシステムとして、イメージPDFに検索用全文テキストを埋め込み、NAMAZUを用いて検索し、該当PDFファイルをリストアップし、ダウンロードできるシステムをあわせて構築した。

ここで問題になることは、保健福祉の現場でのIT化の遅れである、インターネットも職場では自由に利用できなかったり、IT機器の整備の遅れで、豊富な情報源を活用できないなど、有益な情報を発信しても、その存在を知らしめることができないなど、保健福祉の現場における格差をどう埋めるかが今後の課題といえよう。都道府県庁のレベルではITは十分に普及されており、政策立案を担う立場の行政官にとっては、十分な活用可能な情報資源になると確信している。

過去の分担研究班「心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究」において、1975年度から1999年度までの心身障害研究報告書および子ども家庭総合研究報告書の電子化を行ったものであり、CD版データベースとして完成されている。Web上でのデータ提供は国立保健医療科学院が提供している厚生労働科学研究データベースの中で、検索機能のないデータで提供されている。ここで扱われている報告書電子データは筆者らの分担研究班が作製したものであり、国立保健科学院のHP「厚生省心身障害研究データベース（昭和50年～平成9年）」のメニューのもとで広く提供されている。しかし、残念ながら、平成10年度以降の報告書のデータベースは厚生労働科学研究として一括して扱われており、分担研究者報告書や研究協力者報告書を個別に取り出すことができない。

本研究班では、検索機能を工夫し、研究協力者に至るまでの個々の論文が取り出せる仕組みを構築した。これにより、Web上で自由語検索により目的の論文を抽出し、報告書の全文を入手できる。

E．結語

1）過去の研究班（心身障害研究および子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究）において、完成した報告書データベース（1975年度から1999年度）CD版の電子データを用い、Web上で提供できるデータベースを再構築した。

2）次年度以降の計画として、試験試行後、過去の厚生省心身障害研究報告書から最新版の子ども

家庭総合事業報告書の全文データベースを母子愛育会日本子ども家庭総合研究所のサーバーからインターネット上に提供する予定である。

F．研究発表

1）中村　敬、斉藤　進、庄司順一、中沢明紀：心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究、平成9年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）「母子保健情報の登録・評価に関する研究」報告書、1998　pp 189-195

2）中村　敬、斉藤　進、庄司順一、中沢明紀：心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究、平成10年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）「母子保健情報の登録・評価に関する研究」報告書、1999　pp　283-303

3）中村　敬、斉藤　進、庄司順一、中沢明紀：心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究、平成11年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）「母子保健情報の登録・評価に関する研究」報告書、2000

4）日本子ども家庭総合研究所ホームページ：中村　敬「なかむらのほーむぺーじ」－研究報告書－「心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化に関する研究」、http://www.aiiku.or.jp./rpi/nakamura/CDROM/CD.htm (accessed at 2003/3/1)

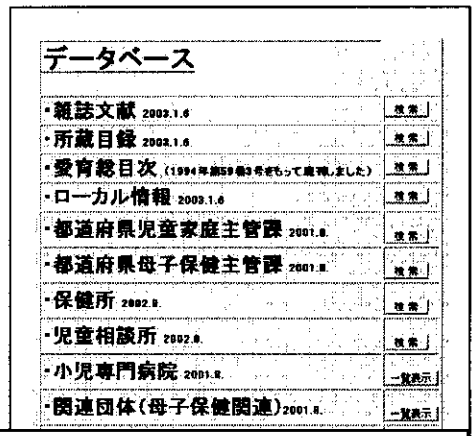
5）斉藤 進、中村 敬、小山 修、平山宗宏：母子保健情報の提供に関する研究－心身障害研究・子ども家庭総合研究報告書のデータベース化－、第47回小児保健学会講演集、2000、pp184-185

6）斉藤　進・小山　修・中村敬：母子保健・児童福祉領域における情報提供のあり方に関する研究－インターネットにおける子育て情報－，第59回日本公衆衛生学会総会．（2000.10,群馬県）（CD-ROMデータベースのデモ実施）

新規データベースの構築について

平成15年1月28日

日本子ども家庭総合研究所
研究企画・情報部
システム管理室



1. 従来のデータベース

（左図：現在のデータベース）

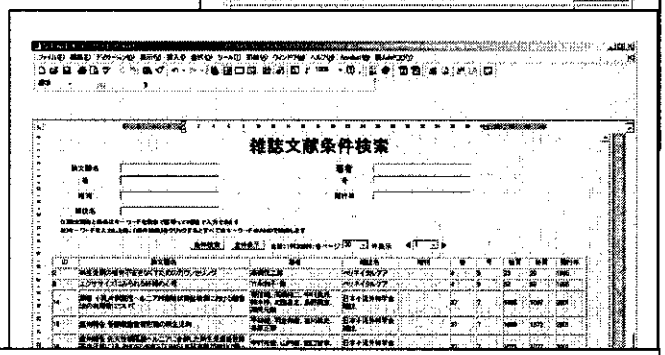
2. 新規データベース

研究論文・報告書データベース

（画面イメージ未定）

①子ども総研紀要（愛育研究所紀要を含む）

②子ども家庭総合研究報告書（心身障害研究を含む）



3. データベース検索のシステム

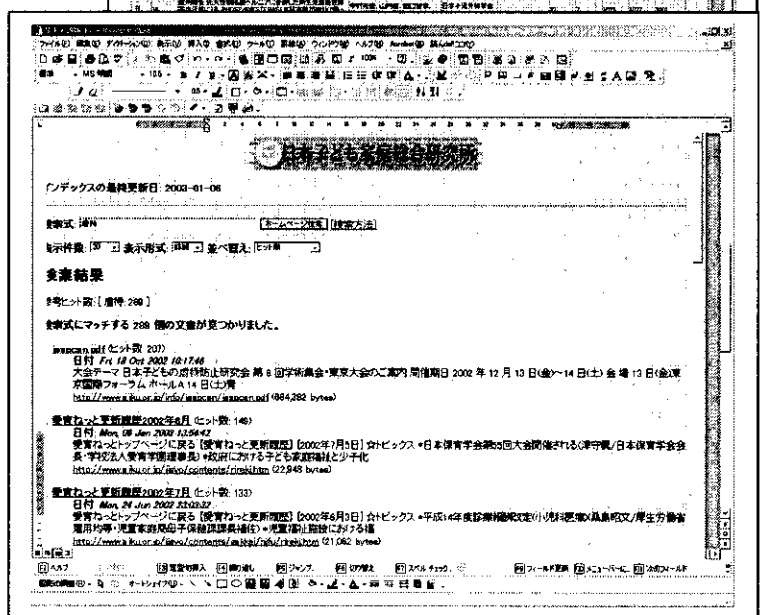
①書誌情報のみの検索（左図）

②NAMAZUを使用した全文検索

（下図イメージ）

4. 検索結果閲覧・ダウンロード方法

検索された論文はブラウザ上のアクロバットリーダーで閲覧、PDF形式のファイルのダウンロード可能。



検索結果のイメージ

5. その他

本データベース使用者は、登録が必要

利用者の登録システム（氏名、所属、メールアドレス等）